

私の個人主義

夏目漱石

夏目漱石(なつめ そうせき)

1867～1916 作家。本名金之助。江戸牛込の生まれ。東京大学英文科を卒業。1900年文部省留学生として渡英, 帰国後東京大学にて「文学論」「十八世紀英文学」を講ずる。まもなく朝日新聞社に入り, 以後多くの名作を残す。主著に『吾輩は猫である』『こころ』『明暗』など。



定価はカバーに表示してあります。

私の個人主義

夏目漱石

1978年8月10日 第1刷発行

1992年1月20日 第25刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 株式会社廣済堂

製 本 株式会社国宝社

© Kodansha 1978

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

なお、この本についてのお問い合わせは学術文庫編集部宛にお願いいたします。

ISBN 4-06-158271-2

(庫術)

私の個人主義

夏目漱石

日本財団支援

講談社学術文庫

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

この本によせて

この本は夏目漱石の講演集である。漱石は諸処で講演をしたが、そのうちで、後に書き直したり、手を加えたりしたものが評論として伝っている。その中でも、今日なお有意義なものを選んで、ここに編輯した。

漱石は座談や講演の名人である。しかし漱石は当意即妙に話をその場限りに終らせていない。話術に好妙で、諧謔に富んでいる点では人後に落ちないばかりか、なにげない日常の事柄を緒口に、識見や主張を語り、蘊蓄を傾け、独創的な思想に導き、極めて魅力に満ちている。

本書は漱石の講演集『社会と自分』に『私の個人主義』を加えて二巻としたものの第一輯である。『社会と自分』（大正二・二、実業之日本社刊）は好評で、二年後に縮刷再版した。その際に、漱石は、「自序」で、「私の講演が……今日になつても、……読者の役に立つだろうという自信を、私は十分有つていのである」と自負している。まさに自負の通り、半世紀以上たった今日でも、陳腐にならず、教えるところが多い。その魅力は漱石の根本思想に

ある。

夏目漱石はすぐれた思想家である。その根本思想は、一口でいえば、近代社会の形成原理としての近代個人主義思想である。英国留学中に封建思想にもとづく他人本位の立場から脱却して、自己本位の立場をかためたことは、本書におさめる『私の個人主義』に明かである。自己本位の立場は、家のためとか、国のためとかという名目を必要とする他人本位の立場に對していわれるもので、利己主義とは異った近代個人主義思想を意味している。

漱石の個人主義思想は、個人に出發して、広い意味で、社会国家との關係を考えている。同時代の自然主義思想もまた個人主義思想であつたが、自己の問題にとどまり、社会国家を思想的に究明することを怠つた。しかるに漱石は個人の問題にとどまらず、社会、国家の問題を論理的に考え、道德、文化等の諸般の問題に及んでいる。たとえば個人が社会に關係する仕方としての職業を考え、資本制社会の中で、職業が人間に孤立化と不具化とをもたらすことを逸早く指摘している。漱石は管理社会とか情報社会とかいうものを知らない昔に現代の悲劇を警告している。

漱石の問題はまた内面の生活の追求にあり、窮極まで論理を尽して追いつめ、これを超えようとつとめ、時代に先んずるところがあつた。生死の問題に真剣に取組み、東洋風に道をもとめる舞台として小説世界を構築し、感想や漢詩に真意を漏した。評論では宗教・道德の

問題を含めて、社会、国家から、多く文明文化に^た渉り、現代人の苦悩を明かにした。有名な『現代日本の開化』においては、日本の近代化が内面的ではなくて外発的なことを指摘したにとどまらない。今なお多く封建的遺制を遺し、外発的たらざるを得ない現代日本の苦悩を先見の明をもつて語っている。

漱石の評論は半世紀以上も昔のものであるが、その思想は今日なお示唆するところが多く、日本の将来を探索する多くの指針を含んでいる。漱石文学は繰返し出版されているが、その要^{かなめ}といふべき講演集・評論集が初めて文庫判で出版され、日本国民に親炙^{しんしやく}され、思考の基盤ともなることは喜ばしい限りである。

昭和五十三年三月

瀬沼茂樹

目次

この本によせて……………	3
道楽と職業……………	9
現代日本の開化……………	37
中味と形式……………	67
文芸と道德……………	93
私の個人主義……………	120
解説……………瀬沼茂樹	158

私の個人主義

道楽と職業

唯今は牧君の満州問題——満州の過去と満州の未来というような問題について、大変条理の明かな、そうして秩序のよい演説がありました。そこで牧君の披露によると、そのあとへ出る私は一段と面白い話をするというようになったが、なかなか牧君のように旨く出来ませぬ。ことに秩序が無かろうと思う。唯今本社の人が明日の新聞に出すんだから、講演の梗概を二十行ばかりにつづめて書けという注文でしたが、それは書けないと言って断ったくらいです。それじゃア饒舌らないかというのと、現にこうやって饒舌りつつある。饒舌る事はあるのですが、秩序とか何とかいう事が、ハッキリ句切りが付いて頭に畳み込んでありませぬから、あるいは前後したり、混雑したり、いろいろお聴きにくい所があるだろうと思います。ことにあなた方の頭も大分労れておいででしょうから、まず成るべく短かく申そうと思ふ。

私の申すのは少しもむずかしいことではありません。満州とか安南とかいう対外問題とは違つてごくやさしい「道楽と職業」という至極簡単なみだしです。内容も従つて簡単なもの

であります。まあそれをちよつと僅かばかりお話をしようと思う。

元来こんな所へ来て講演をしようなどとは全く思いもよらぬことでありましたが、「是非出て来い」とこういうわけで、それでは何か問題を考えなければならぬからその問題を考える時間を与えてくれと言いましたら、杜の方では宜しいといつて相応の日子を与えてくれました。ですから考えて来ないということも言えず、出て来ないということも無論言えず、それでとうとうここへ現われる事になりました。けれども明石という所は、海水浴をやる土地とは知っていました、演説をやる所とは、昨夜到着するまでも知りませんでした。どうしてああいう所で講演会を開く積りか、ちよつとその意を得るに苦しんだくらいであります。ところが来て見ると非常に大きな建物があつて、彼処で講演をやるのだと人から教えられて始めてもつともだと思ひました。なるほどあれほどの建物を造ればその中で講演をする人はどこから呼ばなければいゝゆる宝の持腐れになるばかりでありましょう。従つて西日がカン照つて暑くはあるが、せつかくの建物に対しても、あなた方は来て見る必要があり、また我々は講演をする義務があるとも言おうか、まアあるものとしてこの壇上に立つたわけである。

そこで「道楽と職業」という題。道楽といひますと、悪い意味にとお酒を飲んだり、または何か花柳社会へ入つたりする、俗に道楽息子といひますね、ああいう息子のする仕業

それを形容して道楽という。けれども私のここでのいう道楽は、そんな狭い意味で使うのではない、もう少し広く応用の利く道楽である。善い意味、善い意味の道楽という字が使えるか使えないか、それは知りませぬが、だんだん話して行く中^{うち}に分るだろうと思う。もし使えなかつたら悪い意味にすればそれで宜いのであります。

道楽と職業、一方に道楽という字を置いて、一方に職業という字を置いたのは、ちょうど東と西というようなもので、南北あるいは水火、つまり道楽と職業が相闘う所を話そうと、こういうわけである。すなわち道楽と職業というものは、どういふように関係して、どういふように食い違っているかということをもつともその道楽も職業も、既に御承知のあなた方にそういう事を言う必要もなし、私も強^しいてやりたくはないが、しかし前申したようなわけでわざわざ出て来たものだから、そこはあなた方に既にお分りになっている程度以上に、一步でももう少し明かに分らせることが、私の力で出来ればそれで私の役目は済んだものと内々高を括^{くく}っているのであります。

それで我々は一口によく職業といいますが、私この間も人に話したのですが、日本に今職業が何種類あつて、それが昔に比べてどのくらいの数に殖^ふえているかということを知っている人は、恐らく無いだろうと思う。現今の世の中では職業の数は煩^{わづ}雑^{ざつ}になつてゐる。私はかつて大学に職業学という講座を設けてはどうかということを考えた事がある。建議しやしませ

ぬが、ただ考えたことがあるのです。何故だというと、多くの学生が大学を出る。最高等の教育の府を出る。勿論天下の秀才が出るものと仮定しまして、そうしてその秀才が出てから何をしているかという、何か糊口の口がないか何か生活の手蔓はないかと朝から晩まで捜して歩いている。天下の秀才を何かないか何かないかと血眼にさせて遊ばせておくのは不経済の話で、一日遊ばせておけば一日の損である。二日遊ばせておけば二日の損である。ことに昨今のように米価の高い時はなおさらの損である。一日も早く職業を与えれば、父兄も安心するし当人も安心する。国家社会もそれだけ利益を受ける。それで四方八方良いことだらけになるのであるけれども、その秀才が夢中に奔走して、汗をダラダラ垂らしながら捜しているにもかかわらず、いわゆる職業というものが余り無いようです。

余りどころかなかなか無い。いま言う通り天下に職業の種類が何百種何千種あるか分らないくらい分布配列されているにかかわらず、どこへでも融通が利くべきはずの秀才が懸命に馳け廻っているにもかかわらず、自分の生命を託すべき職業がなかなか無い。三箇月も四箇月も遊んでいる人があるのでこれは気の毒だと思うと、豈計らんや既に一年も二年もボンヤリして下宿に入って為すこともなく暮しているものがある。現に私の知っている者のうちで、一年以上も下宿に立て籠って、未だに下宿料を一文も払わないで茫然としている男がある。もっとも下宿の方でも信用しているから貸しておくし、当人もどうかなるだろうと思って安

心はしているらしいが国家の経済からいうと随分馬鹿氣た話であります。私も多少知っている間柄だから氣の毒に思つて、職業は無いか職業は無いかくらい人に尋ねて見るが、どこにもそういう口が転がっていないので残念ながらまだそのままになっています。

けれども今言う通り職業の種類が何百通りもあるのだから、理屈からいえばどこかへ打付かつて然るべきはずだと思ふのです。ちょうど嫁を貰うようなもので自分の嫁はどこかにあるに極つてゐるし、また向うでも捜しているのは明らかだ、つい旨く行かないといつまでも結婚が後れてしまう。それと同じでいくら秀才でも職業に打付からなければしょうがないのでしよう。だから大学に職業学という講座があつて、職業は学理的にどういふように發展するものである。またどういふ時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出て来るものである。と一々明細に説明してやつて、例えば東京市の地図が牛込区とか小石川区とか何区とかハッキリ分つてゐるうちに、職業の分化發展の意味も区域も盛衰も一目の下に瞭然会得出来るような仕掛けにして、そうして自分の好きな所へ飛び込ましたら洵に便利じゃないかと思ふ。まあこれは空想です。實際やつて見ないから分らぬが、恐らく出来ますまい。出来たら宜からうと思ふだけです。非常に經濟なことにはなるでしょう。

こんな考を起すほどに私は今の日本に職業が非常に沢山あるし、またその職業が混乱錯雜しているように思ふのです。現にこの間も往来を通つたら妙な商売がありました。それは

家とか土蔵とかを引きずって行くという商売なんだから私は驚いたのであります。この公会堂をこのまま他の場所へ持つて行くという商売です。いくら東京に市区改正が激しく行われたって、そう毎年建てたばかりの家の位置を動かさなければならぬというように変化していやアしない。現に私の家などは建った時から今日まで市区改正に掛らずにいる。よほど辺鄙な所にあるのだからでしょう。けれども縦令繁華な所にいたって、そう始終家を引ッ張ッてッて貰わなければならぬという人はない。しかるにそれを専門に商売にしている者があるから、東京は広いと思つたのです。

馬琴の小説には耳の垢取り長官とかいう人がいますが、他の耳垢を取る事を職業にでもしていたのでしょうか。西洋には爪を綺麗に掃除したり恰好をよくするという商売があります。近頃日本でも美顔術といつて顔の垢を吸出して見たり、クリームを塗抹して見たりいろいろの化粧をしてくれる専門家が出て来ましたが、ああいう商売は恐らく昔はないのでしょうか。今日のように職業が芋の蔓見たようにそれからそれへと延びて行つていろいろ種類が殖えなければ、美顔術などという細かな商売は存在が出来なかうと思う。もつとも昔はかえつて今にない商売がありました。私の幼少の時は「柳の虫や赤蛙」などといつて売りに来た。何にしたものか今はただ売声だけ覚えています。それから「いたずらものはいないかな」といつて、旗を担いで往来を歩いて来たのもありました。子供の時分ですからその声を聞くと、

ホラ来たといって逃げたものである。よくよく聞いてみると鼠取りの薬を売りに来たのだそうです。鼠のいたずらもので人間のいたずらものではないというのでやっと安心したくらいのものである。

そんな妙な商売は近頃頓と無くなりましたが、締括った総体の高からいえば、どうも今日の方が職業というものはよほど多いだろうと思う。単に職業に変化があるばかりでなく、細かくなっている。現に唐物屋というものはこの間まで何でも売っていた。襟とか襟飾りとかあるいはズボン下、靴足袋、傘、靴、大抵なものがありません。身体へ附ける一切の舶来品を売っていたといつても差支ない。ところが近頃になるとそれが變つてシャツ屋はシャツ屋の専門が出来る、傘屋は傘屋、靴屋は靴屋とちゃんと分れてしまいました。靴足袋屋……これにはまだ専門は出来ないようだが、今に出来るだろうと思います。現に日本の足袋屋は専門になっています。十文のをくれといえは十文のをくれる、十一文のをくれといえは十一文のをくれる。

私が演説を頼まれて即席に引受けないのは、足袋屋みたいになつて出来合いがないからです。どうか十文の講演をやってくれ、彼処は十一文甲高の講演でなければ困るなどと注文される。そのくらいに私が演説の専門家になつていればわけはありませんが私のお手際はそれほど専門的に発達していない。素人が義理に東京からわざわざ明石辺までやって来るとい